

国宝・松林図屏風

長谷川等伯展

4月25日(月)～5月8日(日)



お問い合わせは

石川県七尾美術館

☎ 53-1500

「松林図屏風」(右隻部分) 長谷川等伯筆 東京国立博物館蔵

今回は、等伯の簡単な略歴と、等伯と七尾についてご紹介します。

長谷川等伯の画筆の軌跡

長谷川等伯は、室町時代末の天文8年(1539年)能登国の戦国大名・畠山氏の家臣である奥村文之丞宗道の子として七尾に生まれました。幼少の頃に染物業を営む奥村文次という人物を通して、同じく染物屋の長谷川宗清の元へ養子に迎えられたと言われています。また、養父・宗清も絵を描いたと見られています。

【20歳代】

20歳代から信春の名で仏画を中心に描いて活躍、七尾・羽咋・富山・高岡などに作品が現存しています。

この頃からすでに京都を行き来し、中央の技術を学んでいたと考えられています。

【30歳代】

30歳を過ぎて妻妙浄と息子久蔵を連れて上洛、本延寺の本山・本法寺の塔頭・教行院に住して活動します。本法寺には等伯の作品などが多く現存しますが、その中の1点「日禿上人像」は今回展示されます。

【40歳代】

40歳代の動向は明らかではありませんが、最も親しかったと言われる本法寺第10世・日通上人や、交流があったと見られる千利休も大坂堺の

出身である事などから、この頃の等伯は堺の文化人や商人たちと親交を結び、優れた作品から学び、長谷川派の基礎を築いたのではないかと考えられています。

当時の堺は商業都市として栄え、茶の湯も盛んで中国の画家たちが描いた名画が床の間を飾っていたと見られています。

【50歳代】

50歳代には名を等伯と改め、長谷川派を率いてエリート画系である狩野派を脅かす存在へと成長していきます。

しかし、僅か2歳で亡くなった秀吉の長男・鶴松の菩提を弔うために建てられた祥雲寺の、国宝「楓図」を含む金碧障壁画群完成間近、後継者として期待された息子の久蔵が急死するのです。

その悲しみの中で描いたのが「松林図屏風」と言われています。描かれた松林は、能登の松林にあまりにも似ています。等伯の心に映し出されたのは、能登の原風景だったのではないのでしょうか。

この時代からの等伯は水墨画に美の境地を求めようになり、辛い時期でありながら、一方では水墨画の名作を次々と生み出していくのです。